

歌語がふえ、和歌のもつ味わいは深まり、更に吾々鑑賞者の情緒をも豊かにする効果を与えている。

藤原家隆論

第三回卒業 伊藤 君子

論文を「序」「本論」「むすび」とし、「本論」を三つの章に分け、更に一章と二章とを節に細分し、いくつかの異なった方向から家隆を見ていった。そうすることによって、新古今時代の歌人として、定家と並び称された家隆の歌に対する情熱と精神とを探ろうと試みた。その情熱と精神とを探る中心を、家隆の「秋歌」に置いてみた。それは、秋歌に秀歌が多いことと、また私自身、秋歌に心引かれる歌が多かったからである。秋歌を探ることは、つきる所、家隆の全貌を探ることにも通じると思った。また、「歌人」としての家隆を深く知るためには、「人」としての家隆を知ることにも必要と思ひ、本論の第一章で、「家隆の生涯」を述べた。第二章には「秋の歌人家隆」と題し、論文の中心をもってきた。第三章は、第二章を展開し、まよめの意味として、「家隆の歌風と作歌態度」を述べてみた。第一章「家隆の生涯」を、(一)家隆の家系、(二)家隆の生涯、(三)承久以後に於ける家隆と後鳥羽院との親交関係の三つの節に分けた。この章の中では、(四)に中心を置いて述べたつもりである。(五)では歌人生活の面を中心とした生涯を見たのに対し、(六)では、人間家隆の一断面を、後鳥羽院との主従関係を通して見ていった。

承久の変後の後鳥羽院の逆境生活、主のいなくなった歌壇、そう

云う悲痛な状況の中での家隆の晩年を見ていった。晩年の家隆は、以前と変わることもなく歌を詠じ、院を案じ、敬うことを忘れなかった。院の隠岐遷後も家隆は、「後鳥羽院歌合」の判者をつとめたりして、院へ誠実味のあるところを示した。歌人としても、新勅撰集入集歌数の第一位を占め、深い感動をたたえた殊勝な歌風を大成した。

第二章は、(一)「家隆の秋歌に対する態度と評価」を四季歌の歌数の面から、家隆が秋歌を、どう捉えているかをみた。その結果、四季歌のうち、夏・冬・春歌よりも、秋歌を数多く詠じて立ることから、秋歌をもっとも重視したとみた。(二)は「家隆の秋歌に対する評価」とし、のちの時代の歌人達が、家隆の秋歌をどうみているかを、勅撰集に入集された入集状況を春歌と対比してみた。勅撰集にとられた秋歌は60首、春歌48首で、家隆の秋歌が時代に左右されない安定した評価を受けた。(三)は「家隆の秋歌の素材の特徴と傾向」とし、秋歌を家集「壬二集」から拾い上げ、具体的な秋の素材を調べてみた。その結果次のようになった。

素材	回数
月	173
風	121
露	83
萩	59
紅葉	51
夕	45
鹿	42
空	39
虫	23
雁	23
菊	18

「月光」や「風」を素材として、家隆の歌の特色がみられるが、俊成に師事して、なお定家とは異った一面を継承した歌人ということができる。

(四)は、「新古今歌人の秋歌に対する家隆の評価」として、(五)をも

う少し展開し、家隆が新古今の撰者として、他の歌人たちの秋歌に對しての評価をみることによつて、より一層、家隆の秋歌の素材の好みと傾向を知らうとした。又、西行と人麿の秋歌を好んだことから、兩者と家隆との歌の類似を見、家隆の歌風を探つてみた。

第三章は、前章の例の後半を受け、「家隆の歌風と作家態度」と題し、定家の歌風に、少し触れ、兩者を比較しつゝ、また本歌取りの姿勢から、家隆の歌風と作歌態度を論じた。そして、後鳥羽院御口伝の「たけもあり、心もめづらしく見ゆ」の批評のように、清澄平明な中に深くこもる感動の詠歌に、家隆の作家態度と歌風とを私なりにみいだそうとした。

〈作品論『門』〉

第三回卒業 塚本 育子

『門』は『三四郎』、『それから』とともに通常三部作と呼ばれている。『門』執筆当時の漱石の健康状態はあまり良いものではなかつた。直後に修善寺の大患がひかえていたのである。小宮豊隆著『漱石の芸術』にあるように、『門』という題名は、小宮豊隆、森田草平の二人が偶然見付けた字をそれにあてるといふ特殊な形でつけられた。(第一章『門』の執筆背景)

『それから』の代助と三千代、『門』の宗助と御米を比較すると、愛の必然性によつて結ばれたという点で共通している。宗助と御米夫婦は、決して裕福ではないが、「一つの有機体」となる程深く結ばれている。それは社会が彼らに背を向けた結果に他ならな

い。この夫婦は十四章であきらかにされるような過去を持つが、六年の年月がたった今は平穩にくらしている。しかしまた一方では、この年月の間に、この夫婦の間にも変化がおきてくる。一つは御米と易者のことであり、一つは宗助と参禅である。これらにおいて二人は互の愛を信頼することができなくなる。御米は病気を契機として宗助への信頼をとりもどせるが、宗助は不安を抱いたまま『門』は終るのである。(第二章宗助と御米)

この夫婦の変化、宗助の不安はどこから来るのか、これに関して「罪の意識」という点からみる学者が多い。たしかに彼らの罪意識は過去においてあつたかもしれないが、現在の彼らにとってそれは時間の彼方に押しやつたことなのである。参禅にまで到つた宗助の心にあるものは、逃避を求めぬ心、何とかしてからりとした気持になりたいたいという心であろう。「恋愛の自由」という点からみれば宗助と御米は決して罪を犯してはいない。罪人のように疎外したのは周囲であり、罪はむしろ周囲にあるといえる。三千代も御米も、信頼すべきものと耐える勇氣と覚悟を持った「恐れない女」であつた。しかし代助がとらわれた物質上の不安よりもっと深い不安を宗助は抱いている。『門』には、これに関してそれ以上の追求はなされてないが、これが『門』の最後にあらわれている暗さである。(第三章罪の意識について)

自分の分別をたよりに生きてきた宗助に、禅の門が開かれるわけはなかつた。分別とはとりもなおさず自己なのであるが、宗助の悩みの本質は自己そのものにあるのだから、これからのがれることができるはずはない。漱石は知性に重きを置く人であり、鋭い知性を持ったが故の悲劇は『行人』にも『心』にもあらわれている。宗助